

授業研究を核とする学校づくり運動の展開 —泡瀬小（沖縄）における学校公開研究会を中心に—

Overall Research on the Creative School Management Movement Centered on
Teaching-Related Research

; Focusing on the Educational Practice at Awase Elementary School

狩野 浩二

Kouji KARINO

要旨

泡瀬小（沖縄県沖縄市）は、校長の宮城和也が着任し、四年目の学校づくりを展開している。宮城は、筆者が1995（平成7）年に沖縄に赴任した当時から、共同研究者としてかわり、沖縄における学校づくり運動の中心として、活躍してきた教師である。その後、筆者は、宜野湾市立長田小（横山芳春校長）、那覇市立宇栄原小（同前）、伊江村立西小（西江重勝・上間順一校長）など、県内の学校における学校づくり運動に関わってきた。宮城校長の学校づくりは、その系譜に位置付く。本年度は、学校づくり四年目において、泡瀬小では学校公開研究会（2017/12/15）を開催した。そこにおいて泡瀬小では80名を超える参観者を得、内外にその成果（授業研究、総合表現）を公開した。その結果、斎藤喜博（1911-1981）を起点とする学校づくり運動の成果から、原理・原則を析出し、その応用として介入授業や総合表現に取り組むことで、教師たちを解放し、「子どもたちの姿の上に、美を創造する（横須賀薫『斎藤喜博 人と仕事』、127-129頁、国土社、1997年）」という課題を達成した。授業において、集中した学習活動を創造するための教材解釈にあり方、授業における児童の発想の取り上げ方とその組織化の手法、総合表現における児童の主体性や自立性を高める指導のあり方、学習形態のあり方などが、その原理・原則として析出され、実践されたのである。本稿では、その四年間の学校づくりについて、斎藤喜博を起点とする学校づくり運動の成果として析出できる教育における原理・原則の内実を検討し、今後の学校教育における「臨床」の学を構築する材料を提起するものである。特に、年間を通じた研究（研修）会のあり方に光をあて、実証的な教育研究（教育研究における『臨床』分野の確立）の実現を目指すものである。

1. 学校づくりの意味

“授業研究を核とする学校づくり運動”とは、斎藤喜博（1911－1981）が校長を務めた群馬県島小学校（群馬県佐波郡島村立島小学校1952－1963、以下、「島小」と略記する）をその起点とするものである。その後、斎藤喜博が直接指導した学校に続き、共同研究者が指導する学校づくりが継続してきた。今日まで継続してきている学校づくり運動である。

本研究は、その運動の沖縄における展開のなかで、4年前（2014年）から宮城和也が校長を務める沖縄県沖縄市立泡瀬小学校（以下、「泡瀬小」と略記する）の学校づくりに光をあてるものである。泡瀬小の学校づくりを通して、斎藤喜博の教育思想の解明をめざすものである。

筆者は、斎藤喜博における仕事の中心は、“学校づくり”にあったとみている。斎藤は学校づくりにおいて次の時代を生きる子どもを創造することにもっとも力を注いだ。そして、斎藤喜博の教育思想を解明するためには、彼が残した教育の原則を応用しつつ、新たな子どもを創造することが必要である。その試みの一つとして、泡瀬小における学校づくりによって創造された子どもに光をあてる。そのことを通して、教育研究における「臨床」分野の確立を目指す。

「臨床」とは、医学における基礎医学研究分野と並立する研究分野である。教育研究においては、カウンセリングの領域において教育における「臨床」分野の成立を標榜したことがあった。北海道大学や都留文科大学において臨床教育の教室が設置されたものの、いずれもカウンセリング領域の研究である。

宮城教育大学では、早くから「臨床教育研究」という授業科目を設定した。その科目の実現を通して、教員養成教育において「臨床」分野の確立を目指した。

しかし、前者は、カウンセリング領域である。教育相談や心理相談などの個別対応、個別指導に

おいて使用された「臨床」である。そのため教育研究の内部ではごく限られた研究領域となった。

後者は、教員養成（教師）教育における「臨床」分野の確立を目指した。教育学研究科修士課程—いわゆる既存の教育学研究科である。今日存在する教職大学院とは異なり、教育学分野として、教育史・教育哲学、教育内容、教育方法学、教育行政学、社会教育、教育社会学などの学問体系に沿った研究科であり、今日では、その存在意義が問われている—の院生が、大学教員の指導の下で学校教育現場に入り、授業研究を行った—筆者は、1991年から、2年間宮城教育大学の学校教育専修に進学し、横須賀薫、武田忠などの大学教員が担当する臨床教育学研究を受講した。その成果は、同名の報告書として刊行されている—。しかしながら、いわゆる既存の教育学研究科内部にとどまる科目であった。その後の教職大学院での教育研究とは直接にはつながるものではなかった。

したがって、管見の限り、教育研究においては、「臨床」分野の研究が確立しているとはいえない状況である。本研究は、これまで追究されることがなかった教育研究における「臨床」分野の研究を確立するための糸口を得るために、“授業研究を核とする学校づくり運動”に光をあてる。

授業研究や学校づくりは、教師と子どもとの接点に関する実践であり、その研究である。授業は、教師と教材と子どもとが密接にかかわり合う世界である。

学校は、教師と子どもとが関わり合うことにより成立する世界である。いずれも、教師と子どもとが相互に関わり合う世界である。

教育研究に「臨床」分野の研究を確立するためには、教師と子どもとの接点に光をあてる必要がある。

斎藤喜博を起点とする学校づくり運動において、もっとも力を注いだのが、教師と子どもとの接点を追究することである。本研究においては、その内実にも光をあてる。

2. 学校づくりにおける学校公開研究会の意味

2017（平成29）年12月15日金曜日、泡瀬小学校の学校公開研究会（以下、公開研と略記する）が終了した。校長の宮城和也は、2014（平成26）年度から泡瀬小に関わるようになった。それ以来四年目の学校づくりが終わったことになる。

昨年度までは、研究会は、学習発表会という形式であった。したがって、参観者には、保護者や地域の方たちが含まれていた。今回は、学習発表会を別日程の12月17日日曜日に開催することとした。15日は、教師や教育研究者を対象とする純粋な意味での研究会としたのである。一沖縄においては、那覇市立宇栄原小学校、宜野湾市立長田小学校などにおいて、公開研と学習発表会を分けて行っている。伊江村立西小の場合は、同時開催となった。いずれも、学校の事情にもよるが、子どもの力が向上してくれば、それに応じて、それに必要となる発表の場（ハレの舞台）を用意する必要がある。泡瀬小の場合は、昨年度までは、学習発表会と公開研とを同時開催していた。

研究会の参加者は、地域の教員を中心に延べ80名程度であったということである。2校時から6校時まで一日がかりの研究会である。1校時は、通常授業を行った。午前だけの参観とか、午後だけのとか、さまざまな参観形態があったということである。

かつての島小公開研究会（斎藤喜博校長の下で群馬県島小において取り組まれたもの）では、8回の公開研究会で、延べ1万人の参観者があったと記録されている。

金子緯一郎編『島小11年史』麦書房、1966年（のち、大空社より『島小研究報告』別巻、1995年所収）によれば1955（昭和30）年度から8回開催された。

“斎藤喜博を起点とする学校づくり運動”の特色には、“学校公開研究会”を実施するということがある。斎藤喜博が校長を務めた島小の8回を

筆頭に、この運動に参加した教師たちは学校公開研究会を一つの目標として学校づくりを展開してきた。

「公開研（コウカイケン）」と呼び習わされたこの会はなぜ開催されてきたのか。それは、“ハレ”の舞台を用意するということである。ハレの舞台にさまざまな参観者を得、子どもも教師も、そこで精一杯の仕事をやる。そのハレの場として用意されるのが「コウカイケン（学校公開研究会）」である。

泡瀬小の場合は、四年目において学習発表会とは別に、公開研を持った。その場において、すべての学級が授業や総合表現に取り組んだ。ハレの場を使って、児童や教師たちの成長をはかる。それが公開研究会をやることの第一の意味である。そのためには、すべての児童と教師とが、そこに関わる必要がある。特定のA学級とか、B教師とか一部の児童や教師が発表するのではない。すべての教師や児童がハレの舞台で活躍するように工夫するというのが一つのポイントである。

一般的に言えば、公開研では、一単位時間の授業において選ばれた一人の教師が授業をすることが多い。5校時に授業が行われ、その後、放課後には全体研究会や分科会などが開かれる。正味は、3時間から長くても4時間程度で行われるのが一般的な研究会である。斎藤喜博を起点とする学校づくり運動においては、島小の2日間を筆頭に、短くとも一日をかけた研究会が開催されてきた。

泡瀬小では、一日の研究会を計画した。昨年度（2016年度）は、1校時から放課後までの研究会としたが、1校時に参観できる教師が少ない一沖縄では公共交通機関が未発達であり、自家用車で訪ねるとしても、相当な距離を移動しなければならないという事情がある。ため、2校時から開催するように改めた。島小の場合も、1校時目は、一般授業で、2校時目から公開研がもたれている。これらは、それだけの時間をかけて研究するだけの内容があるからである。ただ単に、時間を

物理的に延長したのではない。このことからすれば、一般的な研究会が一単位時間の授業と一時間程度の全体会をもって構成されるということは、それが一単位時間をもって示す内容を持ち得ているということの証左でもある。いたずらに長時間の研究会をやるということではないのである。

ちなみに、今年度の泡瀬小公開研のプログラムは、2校時に高学年の授業研究会、3・4校時に低・中学年の合唱と総合表現、5校時に低・中学年の授業研究会、6校時に高学年の合唱と総合表現、放課後に全体会という流れでおこなわれた。

公開研を開催するもうひとつの理由は、教育研究における「臨床」的な意味からの要請である。授業や表現活動を公開する。これは、授業や表現活動に取り組む児童をみる（観察する）ためである。児童の集中力がどれだけ育ってきたかをみるためである。そこには課題が必ずある。その課題を克服するためには、どのような工夫が必要なのかをその場において考えるためである。

泡瀬小において、全校の児童が授業や表現活動に取り組む姿を公開した。一般学級の児童も、特別支援学級の児童も、すべてである。その全児童が授業や表現活動において、どのように取り組むかをみるために公開研がある。

泡瀬小の授業は、一斉学習の場において学級の全員が一つの問いに集中している。そして、それが授業の最中に途切れることがない。常に児童と教師との間に新鮮な緊張がある。追究すべき課題が、明確に存在するのである。

一般的には、教科書（教科用図書）の内容をよく理解している子や解釈などがよくできる子だけが授業で活躍し、そうでない子は、手持ち無沙汰にしているという光景を目にする。それが、泡瀬小にはないのである。

無論、学校づくりが開始した当初はこうではなかった。教師は、飛び石伝いに庭先を走り去るような、いわゆる正答主義的な授業—ある決まった解答が用意された問いが、教師からなされ、児童がそれに答えるという形式化された授業—をして

いた。“ハイハイ”といううるさいくらいの声で自分を指名して欲しいとアピールする児童がかつては泡瀬小にもいたのである。それが次第になくなってきた。

ただ単に知識を貼り付けるような授業では、知識をひけらかすことをよしとすることになる。自ずから競争的になる。しかし、泡瀬小のように学級全体で追究すべき課題が明確に存在する場合は、“ハイハイ”と手を挙げる必要はなくなる。むしろ、手を挙げるより、考えることに児童は集中するわけである。

4年生の教室では、「ごんぎつね」（新美南吉作）の授業—公開研の二校時において、低学年と中学年の研究授業が行われた—が行われていた。“ごんぎつね”が“兵十”のところへ栗や松茸—新美南吉のオリジナル作品（「スパルタノート」に1931年10月4日付手書きされた作品）では、松茸ではなく、キノコである。『赤い鳥』に収録された際に、「松茸」と修正された。松茸に改作されたために、非常に貴重なものを届けていたというように読解されることとなった。キノコであれば、特別なものというよりは、秋の味覚であり、山から採ってくるのも容易である—などをもってきたとき、“ごんぎつね”は、鰻の償い—新美南吉のオリジナル作品では、「償い」という表現は、ない。これも、鈴木三重吉による改作と思われる部分である—をしたときと同じような心境であったのか。そうではなかったのか。“ごんぎつね”から“兵十”のもとにもたらされたもの—栗や茸—は、かなりの量である。なぜそれほどまでして、“ごんぎつね”は、栗や茸などを“兵十”のところへ届け続けたのか。そもそも、“ごんぎつね”は、なぜ“兵十”と関わるようになったのか。“ごんぎつね”はいたずらが好きだということであるが、いたずらで栗や茸をもっていったのか。

こうした具体的な問いが児童から提出されており、それを一つずつ解決する一斉学習が行われている。

一つの問いが解決するかにみえると、また新たな問いが生まれてくる。

その問いにまた新たな問いが生まれる。

“ごんぎつね”は、どうして“兵十”に自分が栗や茸を持って行っていることを知って欲しかったのか。

こうした問題を解決する糸口は、教科書の本文には書かれていない。いわゆる行間を読むという作業である。

授業を行なう教師も授業展開をつくるのに必死である。児童が自分の考えを述べると、それに対して教師も深く考える必要が生じる。“兵十”に自分—ごんぎつね—のことを知って欲しいという“ごんぎつね”の心境は、自分—ごんぎつね—の行為を“兵十”に褒めて欲しいからなのか、自分—ごんぎつね—と友達になって欲しいと“兵十”に対して“ごんぎつね”は思っているのか、“ごんぎつね”は、自分に付いた“いたずら狐”という汚名を返上したかったのか、さまざまな考えが児童から出てくるのである。

斎藤喜博が校長を務めていた島小では、校長が教室に来て児童と一緒に学ぶことを児童が楽しみにしていた。島小の児童が校長である斎藤喜博に対して、また勉強しに来て欲しいというように言っていたというのである。つまり、授業のなかで、児童が教材を介して教師と格闘する、そこに居合わせた校長に対して、一緒に授業に参加して欲しいという児童のイメージである。これと似た状況が泡瀬小では実現されたのである。

公開研を行う学校は、何を誰に対して公開するのか。公開研を“ハレの舞台”と発想すると、児童が活躍する場面を公開研を実施する学校は創るということになる。それを専門家である教師に対して公開をしていた。

斎藤喜博が校長を務めていた島小や群馬県佐波郡境町（現伊勢崎市）立境小学校（以下、「境小」と略記する）では、公開研の場で、A. 授業やB. 合唱、行進、舞踊、C. 教師たちの演劇、などの取り組みが公開され、発表された。

A. 授業は、その後も一貫して取り組まれ、B. 合唱、行進、舞踊は、次第に内容が精選され、跳び箱の種目やマット運動などの種目に加え、舞踊的な表現活動やさらにそれらの表現活動を総合した総合表現が発表されるようになっていった。C. 教師たちの演劇に取り組まれたというのは、教師たちを解放することであったといわれている。さまざまな^{しがらみ}柵や封建遺制などによって、^{がんじがらめ}雁字搦めになっていた教師の精神を解放するために、教師自身の自己解放のために取り組まれたというのである。

泡瀬小では、授業と並んで総合表現に取り組んできた。総合表現は、歌唱、朗読、身体表現からなる総合的な表現活動である*¹。斎藤喜博が島小校長として学校づくりを開始した時点（1952年）では、先述の通り、まだ明確に領域としては成立していなかった。管見の限りにおいて、島小では、船戸咲子が1957年頃取り組んだ表現活動がその嚆矢である*²。斎藤喜博が校長を務めた当初から取り組まれていた合唱やリズム表現、演劇などが、その後の境小校長時代（1964-1969）において、主として丸山亜季による作曲で発表されるようになる*³。その後は、近藤幹雄や梶山正人などの音楽家の参画により、作品がつくられた。『利根川』や『かたくりの花』、『善知鳥の浜』など、次第に抽象度の高い作品も生まれてきている。

泡瀬小のこの四年間（2014-17）で、児童はさまざまな総合表現の教材に取り組んできた*⁴。その成果が今年度は練習の段階から顕著に表れてきていた。

新美南吉原作、梶山正人作曲になる「手袋を買いに」に取り組んだ3年生は、10月に行なわれた練習の一時間で、その作品にあるすべての歌唱部分を歌いこなし。砂に水が染み込むようにとはこのことである。12月の事前研究会では、「ごんぎつね落とした銀貨が一つ、パチパチあわせて楽しそう、ちんちんちん、ちんちんちん、楽しそう、それは決して木の葉じゃない」という歌唱部分

で、下線部の旋律が、レガートに演奏されるところと、「一つ、二つ、三つの火」という歌唱部分で、「ひとつー、ふたつー、みっつのひ」と歌唱していたところを「ひとつ、ふたあつ、みっつのひ」のように歌唱にすることで、表現しやすくなるという、この2点だけを修正したのみであった。

このように、授業や総合表現などの実際の姿をみることによって、児童の状態が分かる。その児童の力にに応じてどのようなところに力を入れるのかを指導するわけである。児童の力が手に取るように分かることによって、教師としての指導のあり方が決まる。このことを実際の指導場面で学び合うことが必要なのである。

3. 学校づくりの展開

公開研に先立って行なわれるのが事前研究会である。その年度の研究が開始されたあと、介入授業—泡瀬小では、協働授業と呼称—や教材解釈などにより、学校全体の教師たちの力を高めていく取り組みが始まる。時期としては、おおむね公開研の半年前くらいからである。

斎藤喜博を起点とする学校づくり運動においては、斎藤喜博が校長を務めていた島小や境小以降において、外部から講師を招聘する研究会を開催するようになる。それは、外部の指導者の知恵を借りる必要が生じるほどに児童の力が高まっていったからである。ただ単に外部から指導者を得るということではないのである。

斎藤喜博の生前は、斎藤喜博自身が外部講師を務め、そこに大学の教育研究者等が加わった。斎藤喜博没後は、教育研究者の手によって学校づくりが支えられてきたのである。

沖縄の場合は、内地—東京—から講師を招聘する地理的な事情もあり、集中的に一週間程度の講師招聘研修会をもつことが多い。泡瀬小の場合は、各時期において一週間単位の研修会を設定してきている—全国から共同研究者が集まる学校づ

くり運動においては、集中的な研究会を各時期に持つことが通常である—。

事前研究会の期間中は、おおむね1校時から6校時まで、児童が在籍する時間帯において授業研究を設定する。集中的な研究会においては、児童が在籍する時間帯は授業研究等を集中的に行う。こうしたことが可能なのは、全校の教職員が授業研究を核とする学校づくりに参画しているからである。すべての教職員が参画することで、一週間単位の集中的な事前研究会が計画できる。全学級で授業研究を行うことで、児童や教師全員にハレの舞台を用意する基本条件が揃う。

放課後や昼休みなどにおいては、教師たちだけで行う教材解釈や指導案の検討会がもたれる。泡瀬小の場合は、学年で同じ教材、単元を扱った。このことで、教材解釈や指導案づくりを学年の教師団で協力しながら行うこととなった。学年によっては、新卒の教師等の教員経験の浅いものも存在する。そうしたのも、学年主任のリーダーシップにより育成されるよい機会になっている。

一般的な学校の教育研究と異なり、全学年、全教員で取り組むことでこのように集中的な研修会が設定可能になる。一般的には、学校を代表して1学級、1教師が授業研究を行うということが多い。これだと、学校づくりというよりは、特定の教科目や領域の研究ということになり、大多数の児童や教師たちが無関係—無関心—になりがちである。授業を行うにあたり、対象児童以外を下校させたり、授業をしない教師は、参観者として傍観することとなる。これでは、やはり学校づくりとはならないのである。斎藤喜博を起点とする学校づくり運動において、全教員、全児童にハレの場を用意するということに意を注いできたのは、学校の可能性を追求するためであり、教師や児童の可能性をひらくという発想に立ったからである。

2017（平成29）年度は、8月、10月、12月に行われた。これ以外にも取り組まれているが、筆者が関わったのは、この3回である。西江重勝（元

伊江村立西小学校長、元沖縄県教育庁那覇教育事務所長)、川嶋環(元島小学校教諭)、上間順一(元伊江村立西小学校長、元沖縄県教育庁主任指導主事)など、さまざまな共同研究者が泡瀬小の校内研修会に参画している。

夏休みに行われた8月の事前研究会は、教職員だけで取り組まれる研究会である。その場で12月に行う授業研究に関する教材についての教材解釈、初任者研修の授業、10月に行われる授業研究会の指導案検討、公開研及び、学習発表会で取り組まれる総合表現の教材に関する教材解釈、教職員の実技研修などに取り組んだ。

宮城和也校長が赴任した当初(2014年度)は、事前研究会を10月、11月、12月の三回に分けて実施していた。12月に向けて、10月、11月と一ヶ月ごとに成果を確認したいという意図があった。しかしながら、これだとどうしても教材解釈の時間がとれなくなる。児童が在籍する期間(学期中)では、昼休みや放課後に教師たちだけの研究会を行うしかなくなる。そうすると授業研究に向かう姿勢が弱くなってしまう。片手間に教材解釈を行うことになるのである。

夏休み中に研究会を持つことで、余裕を持って公開研で取り組む教材の解釈が可能になる。時間をかけて教材解釈をおこなうことにより、介入授業の質が高まったのである。

さらには、付帯的な効果として、夏休みに研究会を持つことで教員の実技指導を実施する機会を得ることにつながった。教材解釈と同時に教職員対象の実技研修会を持つことにより、総合表現の指導にあたっての心構えや実技指導の基礎・基本を全校の教職員で共有できることになったのである。呼吸法や指揮法、ステップの技法、身体の脱力、話しかけのレッスン、朗読法など、技術的な面での研修は、ぜひとも必要である。指導者となる教師が自ら実技を経験してみることによって、指導する際のイメージを描きやすくなった。総合表現は、身体的な表現活動である。したがって、身体を使いこなす技術の習得が絶対的に必要なの

である。

10月は、初任者研修などの授業研究が行われた。

さらには、筆者が行う授業研究、総合表現の指導が行われた。

筆者が行う授業研究としては、詩の授業をすることになった。一単位時間で完結する授業を行い、学習を組織するという一つに絞って検討することとなった。教材は、峠兵太作「じんちょうげの花」である。短い詩の教材を使って、一時間限りの授業をつくる。子どもの考えが自然と出てくるような発問を考えることがねらいである*⁵。

総合表現は、この時(10月)から指導が開始される。8月の段階で教材解釈と指導展開についての研修を進めた。その上で、10月までに各学年・学級のなかで最低一つの歌曲が歌えるように指導しておいてもらうことにした。

特に作品のなかでヤマ場になる曲を歌えるようにとお願いをしたのである。

作品との出会いという意味では、その教材のなかでもっとも典型となる部分を先に学ぶことで、その作品のイメージを共有しやすい。一般的には、作品の冒頭から順に指導してしまいがちであるが、しかし、これを繰り返していると、冒頭部分だけ習熟することになってしまう。

練習の際に重要なのは、その作品のなかでもっとも印象的な箇所を最初に取り上げることである。そして、作品の順序にこだわらずに、平易な箇所から、次第に難易度の高い箇所へ—あるいは、児童の力が充実していれば、難易度の高いところを先にやっしまえば、あとは、短時間で習熟することが可能になる—と練習をすすめるなどの工夫が必要である。一般的には、作品の冒頭から終末へと一本調子で練習してしまいがちである。作品のなかにある難所や急所など、ポイントを絞って取り組む方が遙かに上達が早い。

作品には、典型的なところが必ずあり、そこを解決することで全体が飲み込めるということがよくある。

各学年の初期の練習状況を見ながら、公開研に向けて各学年の児童に直接指導する場面となる。

先述の通り、3年生は、学年で取り上げた教材「手袋を買いに」のすべての曲をこの時歌いこなしてしまった。4年生「子どもの世界だ」もほとんどの曲が歌える。2年生「かさじぞう」、1年生「おむすびころりん」と高学年「子どもの四季」「不死鳥の如く」は、少し歌えない部分が出てくる。特に5年生「子どもの四季」は、体育館で対面したときから、児童全体に独特な雰囲気が漂っていた—児童が学級ごとに整列し、また、それぞれが対面するかのようにコの字型の隊形で待っていた—。

取り組む教材は「子どもの四季」である。作品冒頭の「春はどこからとんでき、つくしの芽からとんでき……」という歌曲で始まる作品である。歌ってみると、児童の声が弱々しく感じる。子どもらしい元気強さが感じられない。そこで児童に春の芽吹きイメージについて話したあと、体育館の端から飛び出してきて歌うようにしてみた—昨年度（2016）取り組んだ5年生も同様な状況であった。そこで体育館の端から飛び出してくるようにして、冒頭部分を歌った。すると次第にからだ解れ、柔らかな歌声に変容した。今年度も同様の方法に頼る余り、児童の実態から離れた指導になってしまったのである—。そうすると今度は身体の使い方が少し雑になってしまう。そこで学級を解体してみた。それぞれのクラスをおおよそ半分ずつに分け、AとBの2チームに編成し直してみた。学年で一体の集団にしようと試みたのである。

次第に子どもの心がひらかれてきた。

最終的な成果をみようとして授業の最後に体育館の端から飛び出すようにして冒頭部分を歌ってみた。やはり、身体の使い方が難しい。

共同研究者からは、子どもに柔軟な動きができていないという指摘があった—共同研究者の西江重勝から厳しい指摘があった—。膝の柔軟性がないうために、棒立ちとなり、ドタドタとした動きに

なってしまうのであった。児童の状態がよく見えていなかったのである。その他の学年は、何とか作品との出会いという部分では成功したと思われた。

12月は、公開研の前の週から学校に入った。その翌週の金曜日には、公開研が開催された。その後の週末は、地域や保護者むけの学習発表会である。

前の週は、各学年の総合表現を観た。一時間ごとに、常に児童の状態をみながら、具体的な手立てを考えるわけである。

総合表現においては、児童がその気になって取り組むように仕組むことがもっとも大事である。教師から“やらされている”とか、“教師の指示待ち”とかの状態になってしまわないように、児童が自ら考え、自ら行動するような主体的で、自主的な活動にしていかなければならない。

この点は、昨年度の取り組みで学んだことである。練習指揮と本番指揮があるということは、梶山正人から直にならっていた。しかし、本番指揮がなぜ小さな指揮であるのか、あたかも彫刻家が最後の修正彫りをするかのように慎重な動きにならなければならないと言っていたことについて、深く考えていなかった。昨年度、横須賀薫が12月の事前研から参加し、その際、教師の指示待ちになってしまっている点を指摘した。教師からの指示によって動いているから、子どもの動きに主体性や自立性がないというのである。指揮がなくとも自分たちで考え、動けるように育てなければならないという指摘であり、それができるようになると、児童の動きがずっと生き生きとしたものにかわっていったのである。

こちらでやる仕事としては、子どもが思う存分心をひらいて取り組めるようにすることである。特によい表現をしている児童を取り上げる。それを全体の児童に示す。よい表現をまねるように促すのである。一般的には、教師が示範しなければならない、というような観念があるが、しかし、子どもの表現のなかには、教師のそれを遙かに凌

駕するような素晴らしい表現がある。そうしたものを発見し、児童全体に拡大することが斎藤喜博を起点とする学校づくり運動において、取り組まれてきたことである。そのことにより、児童全体の表現力を向上させる。その上で表現上の課題を取り除く。ここは、指導者の出番である。

1年生「おむすびころりん」は、作品にでてくる言葉や旋律を覚えることに集中している。作品である「おむすびころりん」(梶山正人作曲)は、登場する“おじいさん”が落としてしまった“おむすび”が、地中で生活する“鼠”のもとにもたらされる物語である。おむすびを御馳走になった“鼠たち”は、おむすびを転がして一落として一くれた“おじいさん”を歓待する。したがって、人間界から鼠界への場面の転換が作品中にある。それをイメージするのがなかなか難しい。更に難しいのは、“もてなす”鼠と“もてなされる”おじいさんという登場人物の対比である。その上、一所懸命に歌おうとすればするほど、身体に力が入る。身体に力が入ってしまうと呼吸が浅くなる。言葉や歌を間違えないようにと緊張する余り、表現が小さくなるわけである。作品の筋を説明することではなく、児童が作品の力を借りて、いきいきと表現できるようになることが大事であるが、しかし、なかなかそのように発想すること自体が難しいようである。そこで、呼吸法と立ち方を中心に手を入れた。

2年生は、「かさじぞう」(梶山正人作曲)である。経済的に厳しい暮らしをしている老夫婦が年越しの晩に不思議なことに出会うという物語である。年越しの食料を買い出しに出たおじいさんは、自らすげた菅笠を売ることになる。しかし、すべてが売れ残ってしまう。途方に暮れて家に戻る途中で、おじいさんは、六地藏に出会う。おじいさんは、寒さに凍えるようにしているお地藏様に自ら拵えた菅笠をかぶせる。五つの笠をすべて被せ終えると、最後の地藏様に被せる笠がないことに気付く。そこで、不足した笠の分は、自分の継ぎ接ぎだらけの手ぬぐいで間に合わせるのであ

る。

おじいさんは最後のお地藏様に自分の手ぬぐいを被せて家に戻る。家でおじいさんを迎えたおばあさんは「よいことをしなすった」とおじいさんの労をねぎらうのである。

年越しの晩に沢庵をかみながらお茶をすする老夫婦のもとへ、六地藏が年越しの食料やら餅やらをもってきてくださるというお話である。

この作品のイメージが2年生にはしっかりと捉えられていた。授業研究においても“かさじぞう”に取り組み、相乗効果があったと思われる。それにも増して、教師たちの努力も相当なものであった。教師たちが作品世界をイメージさせるための工夫をさまざまにしてきた。歌唱や朗読に実感がこもっている。課題としては呼吸が浅いことと身体表現が振り付けのようになっているという点であった。教師が一定の動きを決め、子どもにその動きを求めると、どうしても型嵌めになってしまう。動きがぎこちなくなり、子どもの表現への意欲も殺ぐことにつながりがちである。

3年生は、「手袋を買いに」(新美南吉作、梶山正人作曲)である。先述の通り、10月の段階ですべての曲を覚えてしまった学年である。呼吸も深い。十分に息を吸い込んで、のびのびと朗読や歌唱に取り組んでいる。歌唱表現も素晴らしい。あとは、子守歌の場面や作品のイメージである森の世界(狐の住み家)と人間が暮らす街との対比などの理解である。そうしたイメージづくりに役立つようなお話をした。

3年生は、表現するための基礎がしっかりできている。イメージを説明するだけで表現がいきいきとしてくる。一昨年(1年生)からの積み重ねが生きてきている。

4年生は、「子どもの世界だ」(斎藤喜博詞、近藤幹雄作曲)である。唯一学年の担任教師が伴奏役一伴奏者は、音楽専科教員の他、学年の教師、外部からの招聘など、学年によりさまざまである一を務めた学年である。伴奏者は、学年での練習に常に付き添うことができたとのことである。伴

奏者と児童との関係がよい。学年の教師たちの関係がもっともよいと思われた。そのよい関係が児童の表現のなかに見える。学級間の取り組みへの意欲や表現力に差が少ない。学年全体で総合表現に取り組もうという雰囲気である。

12月の事前研究会では、場面間の連続性が問題となった。場面ごとに、間が空きすぎてしまう。心地よい間があれば、子どもの表現もよくなる。さらには、テンポの問題である。子どもの呼吸にあわせる必要がある。低学年の場合は、子どもの呼吸のピッチも速い。十分に歌い込んでくるなかで、次第にテンポを揺らす一緩急をつける一ようにした方がよい。

さらには、作品に登場する「鳥刺し」とそれを懲らしめる「子どもたち」の場面における単純化が問題となった。差し迫る危機に対して子どもたちが団結する。子どもたちに脅威を与える“鳥刺し”を“子どもたち”が力をあわせて追い払う場面である。ここは作品のなかでは無伴奏であるが、子どもたちをその気にさせるために伴奏役の教師が効果音を入れるようにしていた。実際の発表では、そうした効果音をなしにした方がかえって子どもの表現はいきいきとしてくる。ピアノ伴奏の力を借りなくても、自信を持って表現できるようになってくるわけである。

退場の際は、ピアノ伴奏による支援をなしにした。作品のイメージを十分に理解し、共有している児童の姿を生かすためである。ピアノによる伴奏無しで、厳かに退場するようにする。すると子どもたちはそれにこたえるように、立派な姿で歩くのである。

この子たちの退場の姿は、本当に圧巻であった。5年生や6年生を遙かに凌駕するような退場の姿であった。参観者から、もっとも高く評価されたのが、4年生である。

5年生は、「子どもの四季」（斎藤喜博詞、近藤幹雄作曲）である。歌唱が主となる作品である。音楽の時間に5年生の児童は頭声的な発声を学習している。それが徹底しており、地声と頭声との

切り替えが難しいようである。低い音程における歌唱も頭声的になってしまう。これはやむを得ないことである。加えて5年生の児童は作品の一部だけを合唱できるように練習していた。その他の部分は、旋律を斉唱するように練習していたのである。そこで、部分的に合唱となっていたものを、なるべく作品全体を通して合唱表現とするように練習をしてみた。作品は、二部や三部の合唱となっている。しかしながら、一般的には旋律を歌唱するだけで精一杯であるという観念がある。未完成の合唱なら、完璧な斉唱の方がよいという発想である。

普通教育においては、A. “教科目ごとの知識や技能、態度を学ぶ”ということは、各教科目ごとの学習を通して、B. “人格の完成”へと向かうためのプロセスであるはずであるが、A. “教科目ごとの知識や技能、態度を学ぶ”が自己目的化してしまうことがままある。あくまでもB. “人格の完成”をめざすためにA. “教科目ごとの知識や技能、態度を学ぶ”があるのだという発想が必要であるが、しかし、このことを実際の学教教育現場、いわゆる“教育における「臨床」分野”において追究することはなかなか困難である。未完成であっても良いから「やれば出来る」というような楽観的な発想の方が児童はのびのびとするものである。「せいぜいこの程度出来ればよい」というように発想してしまえば、「この程度」以上の向上は期待できないものである。

6年生は「不死鳥の如く」（野村新詩、梶山正人作曲）である。宮城和也が校長として赴任して以来4回目の取り組みである。これまでの学校づくりにおいて6年生が自立することを課題としていた。それを今年度は少しずつ克服してきていた。全員での群読から、次第に単独（ソロ）での朗読が増えてきた。その方がずっとよい。しかしながら、まだまだどうしても、群読でとなる。群読では、一人一人の朗読がまずはしっかりできなければならない。それができないと、独特な節回しで歌うような群読になってしまう。内容のイ

メージとは異なり、語尾を妙に伸ばし、そこだけが強調される。こうしたところを修正した。その上でこの作品の精神を体現するように6年生児童に話した。もっと内省的に、自分自身に語りかけるような表現になってほしいと話したのである。

4. 学校づくりの成果と課題

今年度の泡瀬小における学校づくりの課題は、児童における“個の自立”であった。児童が一人の人間として自立することが目標であった。“自立”とは、ひとり一人が際立って見えるような世界を実現することである。これは、一昨年度の研究会において、共同研究者一川嶋環。昨年度まで共同研究者として、実地指導に携わった一から示された課題であった。児童の学年集団としての取り組みは次第によくなってきた。しかしながら、児童の個としての確立がまだ出来ていなかった。どうしても学級や学年の仲間や先輩、後輩の児童に依存してしまう。教師に頼り切ってしまう児童も出てくる。

児童には、自分の考えを自分の力でつくることを求めた。自分の考えを自ら出せるようになって欲しいという願いのもとで一年間の取り組みが展開した。

授業づくりにおいては、そのことがおおむね成功したと思われる。全学級の授業を見た上で、そのように言ってもよいと思う。一斉授業がすべての学級で成立している。それが、1単位時間の間ずっと継続している。集中が途切れないのである。ここまで児童が育ってきているのである。

総合表現では、入場する児童の姿が最大の課題であった。これは昨年度の参観者一横須賀薫。当時、十文字学園女子大学の学長であり、宮城和也校長の招請で三年目の学校づくりを参観し、直接指導に携わった一から指摘されたことである。入場ができれば、作品全体にわたる表現ができる。入場ができなければ、作品全体の表現が停滞したものになる。これは授業研究や全校合唱において

も同様である。はじめの歌い出しがうまくいくと、あとは自然とできてしまうものである。導入は、すべてを決するのである。

入場では、児童が自分で考え、自分の表現する場所に向かって、堂々と歩くように話した。前の児童にくっついて歩くのでは、自信がなさそうに見える。下を向いて手持ち無沙汰そうに歩いたのでは、表現する気持を高めることが難しい。自分のペースで自分の立ち位置に向かって胸を張って歩いていく。それが昨年度から引き継がれた課題である。

これがなかなか難しい。不安な児童は、どうしても金魚の糞のように前の児童に連なって、うつむき加減でちょこちょこ歩いてしまうのである。視線を高く掲げる練習や前の人に連なるのではなく、自分の立ち位置に向かって入場口から真っ直ぐに向かっていく練習などをした。そのなかでよく出来ている児童を見つけては、褒め、それを真似するように児童全体に促す。

中学年や高学年になれば、入場の際の姿にその人の自信や思いが現れるということを話し、自覚を促すことになる。中学年以上の子たちには、人類だけが白眼を持っていることや体つきが自分の感情を支配していることなどを話し、自ら考えて行動することの大切さを話した。子どもの状態によっては、意識に働きかけるような指導が必要になるものである。

こうした地道なことを通常の教育活動においても徹底していけば、子どもの主体性や自立性が磨かれる一助になる。

この四年間の泡瀬小の取り組みによって、より質の高い児童の姿を創造することを求めた。子どもが自ら集中し、主体的に学ぶ姿を創造しようと努力してきた。

教師たちの教育への意欲や情熱が高まる。すると、それが児童にも好影響を与える。こうした事実を改めて実際の学校教育現場において学ぶことになった。そして、やり甲斐を感じたときに、人間は何よりもそのことに喜びを感じる。そうした

喜びがあれば、実現のために努力を惜しまなくなるといふ事実は何度も遭遇した。

近年は、教員の多忙感、多忙化の課題が指摘される。確かに、学校教育現場は、忙しい。ITの導入により、より忙しくなったように思う。しかしながら、泡瀬小の四年間で多忙化が課題になったことは一度もなかった。授業研究が負担であるとか、介入授業が負担という声はまったく出てこなかった。

もちろん、泡瀬小では、校長が無駄な会議を省略した。教師たちができるだけ本質的な教育活動に専念できるような環境を校長は整えた。そうした校長の力は、大きい。

例えば、小さなことであるが、学校によっては、教職員が総出で外部から招いた講師を出迎えたり、見送りしたりする光景に出くわす。しかし、泡瀬小にはそのようなことは全くない。あるのは、爽やかな挨拶である。心のこもった会釈である。こうした極めて人間的で、実質的な心の交流を大事にすることが児童にもよい影響を与える。

斎藤喜博が島小校長時代（1952-1963）に学校近くに新しく道路が開通した。村役場からその道筋に児童を出し、パレードを歓迎するよう要請される。しかしながら、校長は授業中であるからとそれを断ったというエピソードがある*⁶。教育活動を大事にするという一種のパフォーマンス—それまでは、役場のいうことであれば、すべてが正しいかのように受けとめるのがこの地域の学校の実態であった。萎縮し、卑屈になっていた教員たちを鼓舞するというような意味も込められていたと思われる一である。しかしながら、単なる思いつきではなく、こうしたことに一貫して取り組んだのが斎藤喜博を起点とする学校づくり運動の特色である。建前や形式を廃し、実質を尊重することがめざされてきたのである。

教育活動の実質を大事にし、児童を大事にするということ徹底した斎藤喜博の教育観は、泡瀬小の実践において徹底して範となったのである。

こうした取り組みは、はたして保護者や地域からどのように見られていたのだろうか。毎年行われている保護者対象アンケートでは、おおむね7割以上の保護者の支持を得た。昨年度までは、学習発表会と公開研とを同時開催していたことから、公開研と学習発表会のアンケートが一緒になっている。そうしたことを勘案したとしても、非常に高い支持率である。特に授業や総合表現に対する支持が高い。日常生活では見ることでできなかったような立派な子どもの姿が見られたという声が多い。

一般的には、衣装や舞台づくりに忙殺されるPTAの仕事が泡瀬小の場合は全くないということに対しても高い評価が得られている。沖縄のある高校では、生徒が運動会で発表する際のエイサーの衣装を保護者が手作りするのが伝統になっていたということであるが、これが保護者からはもっとも評判が悪かったということである。

教育にとって何が本質であるのか、子どもの発達にとって何が必要なのかという吟味は、実に難しいものである。

優先順位をつけて、思い切って優先すべきことに集中するということが斎藤喜博を起点とする学校づくり運動において、徹底して取り組まれてきたことである。そのために先の国道の開通式のようなエピソードにおいて、しばしば一般的な観念との乖離や齟齬を生むことになる。

しかしながら、教育界においては、なんとしても守らなければならないことがあるはずである。子どもを大事にするということはスローガンでも、教訓でもないのである。実際に事実として提出しなければならない仕事である。そのことを最優先にする姿勢が泡瀬において四年目にして実現してきたのである。

参観者の一人—濱田純一元秋田県教育次長、秋田大学附属小副校長を歴任し、現在は秋田大学特任教授、秋田大学北秋田分校長—は、“ようやく開墾作業が終わりましたね”と校長の労をねぎらった。開墾とはたとえであるが、児童がよい

よ自主的、主体的に学習できる状態になってきたというような意味である。いわば“個の自立”である。泡瀬小が目標としてきたのは、一つはこのことであった。

【附記】本研究は、平成29年度十文字学園女子大学プロジェクト研究費の助成を受けた。

注

- * 1 狩野浩二，鳥小における学校行事の展開、『鹿児島大学教育学部研究紀要』（教育科学編），第56巻，137-163頁，2005年。
- * 2 狩野浩二，同前。
- * 3 丸山亜季『歌曲集Ⅳ オキクルミと悪魔（丸山亜季歌曲集4）』2011年，一ツ橋書房，など。
- * 4 狩野浩二，授業研究を“核”とする学校づくりの現状：沖縄県と泡瀬小学校の場合、『十文字学園女子大学紀要』第47巻，129-142頁，2016年。
- * 5 狩野浩二，沖縄の教育実践から見えてくるもの、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』特別号，117-128頁，2007。
- * 6 狩野浩二，鳥小の教育実践—教師教育，『十文字学園女子大学人間生活学部紀要』第5巻，73-86頁，2007年

